

地震動予測地図高度化WG における議論について

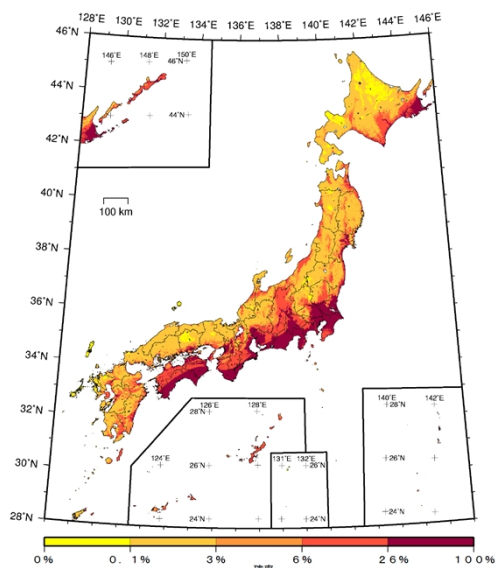
地震本部事務局

第62回地震動予測地図高度化WGでの 地震動予測地図の今後に向けた議論の趣旨

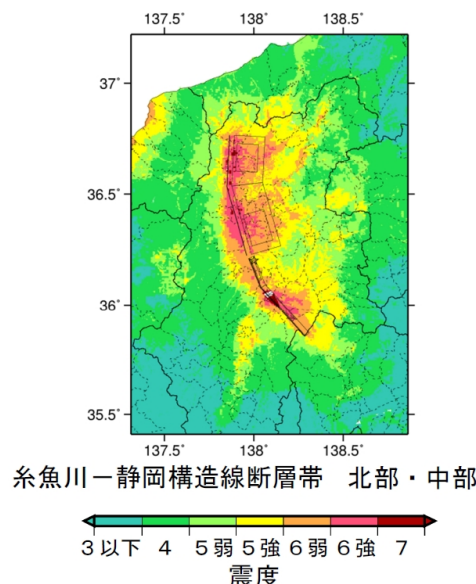
地震本部アンケート結果がまとめられ公表された。また、地震本部20周年シンポジウム等も開かれた。それらの中では、地震動予測地図の今後を考える上で参考とすべき数多くの貴重な意見が各層から寄せられた。そこで7月14日開催の第62回地震動予測地図高度化WGにおいて、論点のたたき台を事務局より提示し、議論することとした。

※この資料は、第62回地震動予測地図高度化WG資料からの引用である。
(総合部会のために一部編集を行った。)

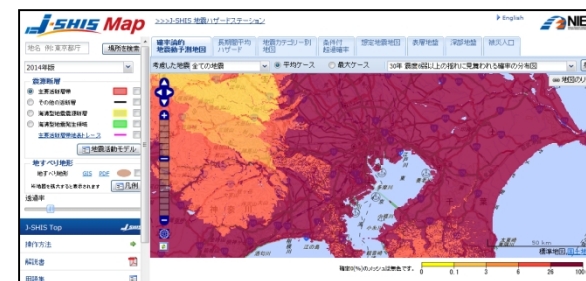
※同WG用に事務局が作成した、論点整理のたたき台であることに留意。



確率論的地震動予測地図



震源断層を特定した地震動予測地図



地震ハザードステーション (J-SHIS)

地震動予測地図の今後に向けた 事務局による論点整理(たたき台)

アンケートやシンポジウムでの意見等を見ると、

(1) 正しい理解の促進方法

ex. 公表成果（二種類の地図など）はどうやって作られているか？

ex. 作られたもの（確率の数値など）はどの程度の精度か？

ex. どのように使えるか？ また、どのように使ってはいけないか？

(2) ニーズに応じた活用方法

の二つの観点が重要であることが伺える。そこで、主にこの二つの観点から今後の取り組みの方向性を考えたい。

ところで、これらはいずれも、本来、地震動予測地図の利用者と利用目的に応じて異なるべきもの（必ずしも同じではないもの）である。

従って、まず、地震動予測地図の利用者と利用目的を整理した上で、最近のアンケート調査結果やシンポジウムでの意見等の概要を整理し、地震動予測地図の今後の方向性を考える上でのポイント案として整理した。

今後は、各ポイントをもう少し詳しく分析した上で、それぞれに応じた取り組みの具体化が必要である。

利用者と利用目的に応じた今後の地図の方向性を考えるために：解説表案

	対象	主な立場	現状の認知度と理解度？	現状の活用実態と課題？	今後の方向性？
A	個人・地域社会	利用者	・認知度はまだ不十分 ・わかりやすいという意見、分かりにくいという意見 ・わかったような気になっているだけの可能性もある	・あまり活用されてはいない ・対策の必要性認識の契機にはなる	・伝えるべきメッセージの明確化 ・メッセージを伝えることを第一目的に ・目的に応じた体裁・表現の成果物を ・効果的な広報・普及方法は要検討
B 1	行政 (国・関連部局)	利用者 発信者	・認知度は高い ・相応の知識を持っている	・独自の検討成果が優先されやすい ・一層の活用の余地・可能性はある ・事務局の連携に改善の余地 ・事情の違いから工程調整等が困難	・事務局同士の連携を更に深める必要 ・成果の関連性や違いの丁寧な説明が必要 ・地方部局等を通じた地域への周知も可能
B 2	行政 (都道府県)	利用者 発信者	・認知度は高い ・基本的な知識がある ・役に立つと認識されている	・成果は各方面で活用されている ・J-SHISも活用され始めている ・独自の積極的な検討事例もある	・一層の広報・普及が必要 ・特に地震本部HPやJ-SHISの詳細周知 ・定期的な意見交換・説明会が効果的
B 3	行政 (市区町村)	利用者 発信者	・認知度に差がある ・J-SHISの認知度は低い ・理解度は不十分な面がある ・役に立つとは認識されている	・情報収集力が低い ・活用するための専門知識が不十分 ・活用を支える専門家が不足	・とにかくまずは周知・理解促進が必要 ・成果を直接伝達する方法は要検討 ・専門家等による丁寧な解説が必要 ・実務で使いやすい工夫が必要
C	企業・法人等	利用者	・認知度は不十分 ・理解度は不十分 ・目的がある場合は活用意欲	・目的が明確な場合は活用されている ・目的に応じた工夫のニーズもある ・大企業では独自検討もなされている	・目的に応じた活用方法や事例の周知 ・詳細情報の公開と技術解説の充実 ・定期的なニーズ調査が望ましい

利用者と利用目的に応じた今後の地図の方向性を考えるために：解説表案（続き）

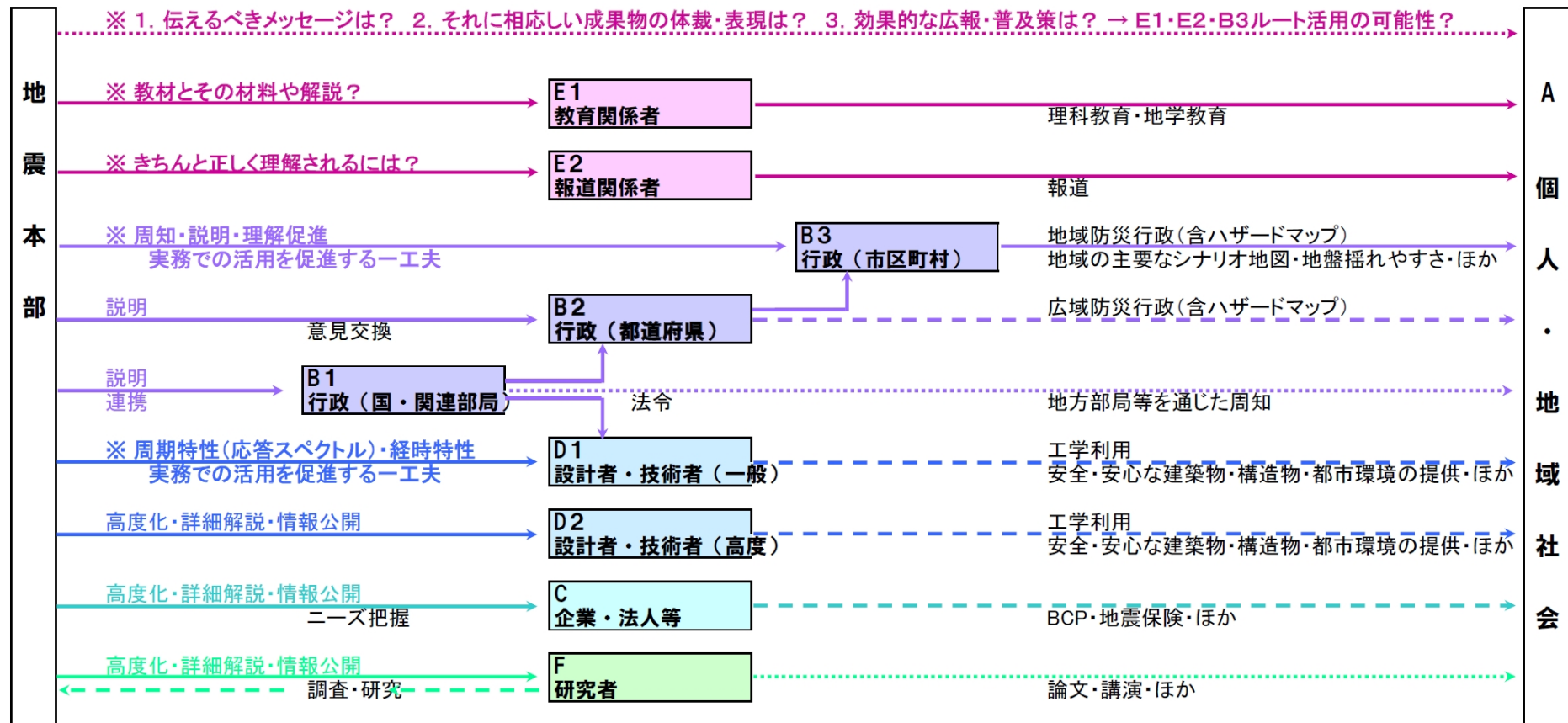
	対象	主な立場	現状の認知度と理解度？	現状の活用実態と課題？	今後の方向性？
D1	設計者・技術者（一般）	利用者	・認知度に差がある ・理解度に差がある	・技術営業等の説明資料には使用可能 ・技術的には十分は活用されていない	★工学利用への展開を図る ・実務で使いやすい工夫が必要 ・周期特性や継続時間の情報の充実 ・一層の広報・普及が必要
D2	設計者・技術者（高度）	利用者	・認知度は高い ・理解度の高い人も多い	・成果は各方面で活用されている ・J-SHISのデータも活用されている	★基本的には今の方針で良いのでは ・一層の高度化が必要 ・詳細情報の公開と技術解説の充実
E1	教育関係者	発信者	・認知度はまだ不十分 ・理解度の高い人もまだ不十分	・十分には活用されていない ・学生・生徒に圧倒的な影響力がある	★市民個人への伝達者たり得る ・誰に何をなぜ教育すべきかの明確化 ・長期的かつ全国的な視点が重要 ・教材とその材料や解説の作成が必要
E2	報道関係者	発信者	・認知度は高い ・理解度に差がある	・社会各層に圧倒的な影響力がある ・活用頻度には時間変動が大きい ・報道部と科学部ではニーズが異なる	★市民個人への伝達者たり得る ・いつ何をなぜ報道すべきかの明確化 ・ニーズに応じた多面的な視点の可能性 ・きちんと理解されることが必要
F	研究者	利用者	・認知度は高い ・理解度の高い人も多いが、差がある	・成果は各方面で活用されている ・J-SHISのデータも活用されている ・誤った発言でも影響を無視できない	★基本的には今の方針で良いのでは ・一層の高度化が必要 ・詳細情報の公開と技術解説の充実 ・学術コミュニティへの情報提供も必要

利用者： 主に地震本部の成果を利用して新たな物や価値を生み出しそれらを社会に提供していく立場
 発信者： 主に地震本部の成果とそれに一部自らの成果や解説を加味して共に社会に提供していく立場

利用者と利用目的に応じた今後の地図の方向性を考えるために：解説図案

地震本部が主体的に
取り組むべき部分

それぞれの立場で利活用する部分
(必要に応じ、地震本部としてニーズ把握や
活用支援を実施)



利用者と利用目的の整理(たたき台)1

■ 個人・地域社会に向けて

1. まずは伝えるべきメッセージを明確にする必要がある。
2. 伝えるべきメッセージに相応しい成果物の体裁や表現を含めて考え直す必要がある。
 - ・大雑把でも良いから本当に大切なことが伝わるように
 - ・評価精度にも根拠にも満足はしておらず今後見直される可能性も
3. 効果的な広報・普及策を考える必要がある。
但し直接伝えにくい → 影響力の大きな伝達者は・・・？
 - ・教育関係者： 理科教育・地学教育のための教材とその材料や解説
 - ・報道関係者： きちんとした正しい理解
 - ・地域行政(市区町村)
 - ex. とにかく周知・説明・理解促進！
 - ex. 地域評価を活かした成果とその解説の充実？
 - ex. 地域のシナリオ地図とその解説の充実？
 - ex. 地域の地盤増幅率(揺れやすさ)の解説の充実？
 - ex. 実務での活用を促進するための工夫？

利用者と利用目的の整理(たたき台)2

■ 工学利用に向けて

- ・地震本部の成果は、それを利用したプロの活動を経て、個人・地域社会に還元される。
 - ex. 安全・安心な建築物・構造物・都市環境の提供・ほか
- ・実務での活用を促進するために、ニーズに応じた使いやすい成果への工夫が必要。
 - ex. 周期特性 → ex. 応答スペクトルの地震動予測地図
 - ex. 経時特性
- ・一層の広報・普及が必要。

■ プロによる高度利用に向けて

- ・基本的には今までの方針の延長線上で良い。
- ・今後とも高度化を怠らない。
- ・一層の詳細解説と情報・データ公開を徹底する。
- ・学術コミュニティへの情報提供による正しい理解の促進も必要。

■ その他

- ・行政(事務局)連携
- ・周知・説明・理解促進